長者小

確かな「見方・考え方」を育てる授業づくり

～各教科等において「聞く」ことの育成を目指した指導の工夫～

（３年計画の３年次）

校長　　島浦　靖

１　研究主題について

(1) 教育目標具現化の立場から

青森県及び八戸市の学校教育指導の方針を受けるとともに、児童や家庭・地域社会との連携のもと学校経営に創意工夫をこらし、教育目標「めあてをもって　自ら学ぶ子」の育成に取り組んでいく。その根幹として校是である「徳と知識を磨く」という理念を共有し、笑顔いっぱいの学校を目指している。学校は、子どもたちにとって学ぶ楽しさを実感できるところでなければならない。その基盤となるのが、学習指導と学級経営である。学習指導では、聞き方を定着させ、授業における児童同士の関わり合いを深めること。学級経営では、月別生活目標やソーシャルスキル・アンガーマネジメント等の指導を通して、支持的風土が溢れる学級づくりに努めることである。これらの基盤づくりによって、本校が目指す研究に取り組むことができると考えた。児童は、各教科等において、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」という、物事を捉える視点や考え方を広げていく。その中で、自分自身が受け入れられ、認められ、かけがえのない存在であることを実感したとき、学ぶ力が育まれると考えた。

支持的風土が溢れる本校において、各教科等の学習だけではなく、生涯にわたって重要な働きをする「見方・考え方」の育成を目指す本研究は、本校の目指す児童像を具現化するために有効であると考え、研究主題を設定した。

(2) 児童の実態から

昨年度の研究結果から、確かな「見方・考え方」を育成するために、「聞き方」についての手立てを学び、活用することによって、友達の話を聞こうとする姿勢が見られるようになった。児童が比べて考えたり自分の発表に生かしたりすることができた。また、「話す人を見て聞く」「うなずきながら聞く」の観点を全校で決めて取り組むことで、教師・児童の意識が高まり、聞くことの基盤作りにつながった。しかし、確かな「見方・考え方」の育成を全体に広げるためには、「聞き方」の底上げがまだ必要であることを実感した。聞くことができても、それを聞いて意見を変えたり広げたり深めたりすることができない児童がいるため、特別支援教育の視点を生かした手立てを講じる必要があることが分かった。また、「聞く」を発展させるために、今後も課題提示の工夫、日常の授業において意識する点として、教師が児童の発言を他の児童につなぐ言葉がけ（コーディネータ機能）をより研究する必要があるということについて、共通理解した。

そこで今年度は、「聞き方」の育成から「聞く」ことの育成に改め、指導の工夫に努めていく。目指す児童像を「見方・考え方」をさらに広げる子どもとし、そのためにも「聞く」ことに重点を置いた指導を工夫することによって、物事を捉える力の育成を目指す。

課題解決に向けて、多様な「見方・考え方」をすることで、「自分でもできる」という自己肯定感をもたせることができ、努力目標の「進んで学ぶ子」の育成につながると考える。

２　研究のねらい

考えの根拠となる確かな「見方・考え方」を育てるために、導入から課題設定までにおける教師の働きかけや、教師が児童につなぐ言葉がけの工夫をすることによって、各教科等における「見方・考え方」が広がる手立ての有効性について、日常の授業実践を通して明らかにしていく。

３　研究仮説

各教科等において「聞く」ことの育成を目指し、導入から課題設定までにおける教師のはたらきかけや、教師が児童につなぐ言葉がけの工夫の有効性について、児童の考えの根拠となる確かな「見方・考え方」を広げることができる。

４　研究内容

子どもの変容が見える授業づくりとして、以下の２点を示す。

(1) 導入から課題設定までにおける教師のはたらきかけの工夫が、日常の授業において実践できているかについて検証する。

(2) 特別支援の視点を生かし、教師が児童につなぐ言葉がけの工夫が、様々なとらえ方ができる「聞く」ことの育成につながる効果について検証する。

5　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名	成果・授業の概要
7	15	第１回授業研究　低学年ブロック 道徳 「くろぶたのしっぱい」 （規則の遵守） ２年３組　教諭　佐藤　芳実	本時は、みんなが使う物や場所を大切にし、きまりを守って気持ちのよい生活をしていこうとする態度を育てる学習である。 問い返しをしたことが、児童の考えを深めることに有効だった。
10	27	第２回授業研究　中学年ブロック 社会科 「自然災害からくらしを守る」 ４年２組　教諭　山崎　孝裕	本時は、「もし自分たちのまちが災害に襲われたら」という想定で、様々な問題に対し、選択・判断を迫る学習である。 イラストを提示することで、避難所に集まってくる人たちの多様性を具体的にイメージさせることができ、最終的に「共助」の考え方に繋がった。
11	11	（午前）教育指導課・センター訪問	各教科において、目標・手立て・評価の研究
		（午後）【要請訪問】 第３回授業研究　高学年ブロック 体育科 「ソフトバレーボール」 ６年２組　教諭　相前　由佳子	本時は、レシーブの行い方を理解したり技能を身に付けたりすることを通して、簡単なゲームに生かすことができるようにする学習である。 前時の活動の振り返りから出された課題「つなげたい」を共有することによって、「つながる」から「つなげる」という児童が目指す姿を入れた課題設定ができ、主体的に課題解決に向かわせることができた。

(2) 一般研修

月	日	一　般　研　修
6	1	ソーシャルスキルトレーニングに関わる研修　校長　島　浦　靖
6	8	特別支援教育に関わる研修会①　なかよし学級　担任　前田　健一
9	28	アンガーマネジメント研修　一般社団法人アンガーマネジメントジャパン
11	1	特別支援教育に関わる研修会②　心のケア研修支援事業 「集団の中で活動しにくい児童への関り方について」　立教大学　教授　大石　幸二　氏
2	15	特別支援教育に関わる研修会③　なかよし学級　担任　前田　健一

6　研究の成果

(1) 導入から課題設定における工夫をすることによって、児童に学びの必要感を与えることや、意欲的に学習に取り組ませることにつながることを確かめられた。

(2) 「聞く」ことを発展させるために、日常の授業において教師が児童の発言を他の児童につなぐ言葉がけ（コーディネータ機能）を工夫したことによって、児童の聞こうとする意識が高まり、自分の言葉で言い換えることができるようになった。

(3) 特別支援教育研修では、立教大学の大石幸二氏やアンガーマネジメントジャパンの佐藤恵子氏の研修を受けることによって、児童に寄り添った授業実践に生かすことができた。

7　研究の課題

(1) 確かな「見方・考え方」を育てるためには、児童が自分ごととして課題に取り組むこと、自己の変容に気付くことが必要である。そのために、問題へのつぶやきや疑問を明確にしたり、自分の立場や考えの変容を視覚的に確認したりする手立ての工夫が必要であると考える。

(2) 児童全員が主体的・対話的に課題解決に取り組むためには、日常的に教師が児童の発言を他の児童につなぐ言葉がけを研究していく。特に、聞く力が弱い児童やうまく話せない児童には、特別支援の視点を生かした手立ての工夫や共有が必要であると考える。

（記入者　相前　由佳子）